

## 「東北のまつり」第三部 ―小正月の行事―

### 製作意図

この映画は「東北のまつり」第三部として、東北地方にのこっている小正月を中心とした行事を記録したものです。

収録した行事は新潟県直江津市西横山の小正月の一連の行事(それは無形文化財に指定されています)と山形県西川町間沢の「お田植」(たうえ)の行事、さらに秋田県横手市の「ぼんでんまつり」です。

※

どうして小正月の行事(農耕儀礼)をとりあげたかといいますと―私たちの祖先はきびしい自然の条件とたたかいながら、日本の農業の発達に大変な苦労と長い努力をつづけてきました。まだ、科学も、技術もすすんでいなかった昔は、底しれない大きい力をもった自然とのたたかいにうちかつには、自然をつかさどっている神々や祖先の神霊とふかく、まじわりむすんで、その加護をうけるほかにないと思っていました。小正月の行事もその一つです。

だから、小正月の行事をはじめとして、いま、なおのこっているさまざまな祭礼や行事のなかには、祖先たちの生産へのひたむきな祈願とたゆまない努力、そしてよろこびが健康で、ゆたかな心ばえをもって、とりおこなわれているのを、みることができます。

しかし、祖先たちのそうした祭礼や行事にこめられた心はしだいに、時代のうつりかわりのなかで、忘れられていっています。そして、祭礼や行事も多くは形だけになるか、すたれていっているようです。また、本来の意味からはなれて、たんなる慣行や一部のもののおまつりになったり、観光や宣伝の手段となっているむきもあります。そこで、私たちは生産とふかくつながっていた祭礼や行事のなかに、とおい、祖先たちの生活の姿をたずね、その本来の意味を知るといことは意義のあることだと思えます。

それは現在の私たちに、民族の歴史をささえてきた土台がなんであったか、をも考えさせます。

この映画で、小正月の行事をとくにとりあげたのは、それらの行事が年のはじめの行事なので、生産とむすびについている意味をもっとも単的にしめし、おごそかに、ゆたかな美しい心情をもって行われているからです。

### 解説にかえて

この映画に収録した行事について若干の補足的な解説を参考までに、しるしたいと思います。

#### (1)若木迎え(西横山)

昔は季節の大きなかわり目には、家々の祖先の神様が、新しい精気をふきこみにこられると思われていました。その神様が正月にきてやどっている山の木(ヌルデ、ミズクサ=ミズキなど)をきって神様をむかえる行事です。小正月(旧暦の正月元旦を大正月といい、十五日を小正月といいます)の前、十一日にその年の恵方にあたる山にはいって迎えます。迎えた木を若木といいます。

若木は小正月の行事につかわれます。

西横山ではこの日に、十五日の夜おこなうサイの神(トンド焼、などというところもあります)の火祭につかう三本のシン木(栗か、桜の木)もまわり番にうけもつ三軒の家の者がむかえてかえります。若木は家々の門口に十四日までかざられ、三本のシン木はサイの神の夜まで、部落の入口にあるサイの神の田甫に天と地をむすぶ神様のよりしろとしてたてておられます。

#### (2) 餅つき—まゆだま(西横山)

十四日の早朝、餅つきをします。つかれた餅を若餅といい、のし餅と、まゆだまにかざる餅にします。まゆだまはもち花の一種で若木のミズクサにつけます。まゆだまは秋のみのりがゆたかであるようにと祈願する年の始めの予祝儀礼です。まゆだまは大黒柱のところにむかえたばかりの歳徳様の棚にそなえ、次に神棚、えびす様の棚などにかざります。

#### (3) お田植(「たえ」ともいっています)

映画におさめたお田植は山形県西川町間沢の行事です。西横山では行われていません。十四日の夕方、雪の田甫にでて、ワラや豆ガラ、そして、カヤなどをうえて、豊作を年の始めに祈る小正月の予祝儀礼です。

#### (4) ものづくり(西横山)

十四日夜。家々では若木としてむかえたヌルデの木で、十五日に焼草あつめや嫁(聳)祝いにつかう棒となる太刀や、十五日の朝餅をやく串などを山鉦でつくります。これは男の仕事です。小正月の行事はほとんど男がやります。その時、炉では若木の枝や太刀や串をつくるのにできるけずり屑をもして十五日の朝たべる小豆がゆをにます。できあがった太刀や串は歳徳様の棚にかざっておきます。

#### (5) 鳥追い(西横山)

同じ十四日夜、部落の小若衆たちはお宮にあつまって、鳥追いの行事をするために堂ごもりをします。あつまった男の子供たちは大人の指図をうけず、いっさいを自主的にやります。おおいにたべ、しゃべり、明方までに幾度も一同そろって、鳥追いにでかけます。鳥追いは害鳥を追いはらう予祝の行事です。と同時に、堂にこもるといふ子供の成長の段階を示す行事であります。鳥追いの一夜は子供たちにとってもっともたのしい行事の一つなのです。

鳥追いの歌

コーリヤ どここの鳥追いだ

ダイロウドン(殿様の意)の鳥追いだ

シロオ(尻)きって、カシラ切って

コンダワラ(小俵)にほうらいこんで

佐渡ヶ島へ ホーホー

蝙蝠も鳥のニンジョ(仲間の意)で ホーホー

という歌を太鼓にあわせてうたいながら行列をつくって雪にうもれた夜の部落の道を、田甫をとおって部落はずれの橋の上では一段と声を追いはらった態をして、お宮にむかってかけてかえり

ます。

#### (6) 焼草あつめ—嫁祝い(西横山)

小正月の十五日の昼、子供たちは歳徳様の棚からさげた太刀をもち家々をまわって夜のサイの神にもす焼草をあつめます。家にいくとまず祝い口上を一同が声をそろえてうたうようにのべます。

サイの神 ワクワク  
ゼン(銭の意)も カネも 十万ガラリン  
結構な十五日で おめでとう

その時初めて正月をむかえた嫁のある家では、嫁祝いをします。神聖な棒である太刀を逆さにして嫁の尻をたたいてたくさん子供をうめと歌いながら祝います。迎えた聲ある場合も同じように祝います。

嫁祝いの時の歌は

男まけ 子まけ(産めの意)  
大の男 十三人  
一つ祝いましょう。

焼草はワラや豆ガラ、麻ガラ、正月のしめなわ、ユズリバ、サカキ、子供たちの書初め、シン木に焼草をくくる初ないの縄などがあります。子供たちが一軒一軒まわってあつめた焼草は部落のあちこちにあつめておきます。

#### (7) サイの神—火祭(西横山)

サイの神はトンドとかサイトウなどという地方もあります。

西横山では、十五日の夜、サイの神の祠(道祖神)の前で、部落の区長が『オーマラ』というフレゴトを大声でさけぶと、部落の男たちは一斉に家をでて、子供たちのあつめた焼草をもってサイの神の田甫にあつまってきます。焼草をはこぶ人たちはすれちがいざまに『オーマラ』、『オーマラ』とたがいに声をかけあいます。『オーマラ』という言葉は十五日の朝から部落の人々がみんな挨拶にもつかいます。ついで、神主の家から使者が神火をオガラのたいまつにもらってきます。使者はもえさかるたいまつをもって『オーマラ』『オーマラ』とさけびながら神主の家からサイの神の田甫にかけつけてきます。

その火で部落の男たちは若木迎えの時、むかえた三本のシン木に焼草をくくりつけて、ぼう大なサイの神をつくってたてます。そして、火は今年 部落に響いりしたものや厄年にあたるものもつおがらのたいまつにわけられ、たいまつをふりながらサイの神のまわりをまわりだします。やがて、たいまつのも火もよくもえついたころ、たいまつでたたきあいをはじめます。それは、聖な火で身をきよめ、厄をはらうためです。

火たたきの行事がおわるとサイの神の頂上にむかってたいまつがなげられ点火をはじめます。

たいまつがうまく頂上になげられると『オーマラ』『オーマラ』という声がさかんにかけられます。サイの神はしだいにもえはじめます。サイの神の火は神々のやどった木の神聖な火ですから、サイの神のもえあがる火勢にその年の豊作をうらない、また祈願するのです。サイの神につけた書初めがもえあがると手があがるといわれます。またその火にあたると病気をしないとわれそののこり火でもちを焼いてたべると疫病にかからないともいわれています。その灰は田や畑にまくとみのりがよくなるともされています。もえあがっていくサイの神の炎と煙は正月の神様がそれによって大空へかえられるだともいわれています。

※

このような火祭は『冬と春との境に大火を焚いて、人力で陽気を促進しようとした慣習』だと思つと柳田国男氏は例をひいていっておられます。これはサイの神が生産と直接、むすびついた行事である意義をなを一層しめしています。また、サイの神が性器をかたどった道祖神であり、その前で火祭をすること『オーマラ』という祝い言葉を十五日につかうこと、はらんめ棒ともいわれる太刀で嫁祝いをするなど西横山の行事をみても作物の豊熟をいのることと性器崇拜とがふかい関係をもって祖先たちの信仰のなかに生きていたように思われます。次の『ぼんでん』もそのことをものがたっているようです。

※

#### ぼんでんまつり(横手市)

ぼんでん(梵天)は大変いろいろの意味につかわれています。梵天は万物のはじまりである宇宙の根源、円滑自在なる神様のことだといわれ、悪魔払いの神様であるとされています。それが、形となったのが、いわゆる「ぼんでん」で、御幣の一種だといわれています。そのような意味で「ぼんでん」は男根を象徴しているともいわれています。

秋田県、横手市の「ぼんでんまつり」は旧暦正月十七日に、各町内、団体、会社、近郊の村々が「ぼんでん」をおしたてて、横手市の郊外にある旭岡山神社へ、豊作満作、商売繁昌をいのって、奉納の先陣あらそいをするのです。はやく奉納したところはその年、豊作だといわれているので「ジヨヤサ」「ジヨヤサ」のかけ声をかけ、はげしいせりあい、もみあいをしながら、山頂の神殿へ殺到します。ぼんでんまつりは年の始めにその年の吉凶をうらなつた年占の一種であるといえましよう。

※

横手市の「ぼんでんまつり」にうたわれる「ぼんでんうた」はこのまつりの性格をうたいあげています。

朝の出がけに  
東をみれば  
黄金まじりの  
霧がふる  
私しや横手のぼんでん唄よ  
人におしまけ

大きらい  
今日は吉日  
日柄もよいし  
なにか ものごと  
きそいあう

企画	東北電力株式会社
製作	岡田桑三
演出・脚本	野田真吉
撮影	植松永吉
照明	若月荒夫
録音	片山幹男
	加々良次郎
音楽	箕作秋吉
解説	増田順二
現像	東洋現像所

『詩かドキュメントか！』野田真吉映像作品を見る会 より抜粋